



TITLE:

<大會抄録>モンゴル帝國の對外文書について

AUTHOR(S):

海老澤, 哲雄

CITATION:

海老澤, 哲雄. <大會抄録>モンゴル帝國の對外文書について. 東洋史研究
1975, 34(3): 455-455

ISSUE DATE:

1975-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/153585>

RIGHT:

の弘通の歴史に關心を抱き、この方面からいささか解明を試みようとするものであるが、今回は、ブリヤートルマ教界の長バンディダー・ハンボラフ *Bandida mkhanpo blam-a* の成立過程に焦點をあてて述べてみたい。

ハンボラマ初代と目されるゲンドゥン・ツェテン・パダル・ギェ・ザ・ヤ・エフ *Dge ldun bstan pa dar rgyas Zaya-yin* は、一七二一年、セレンガブリヤートのツォン・ゴル氏に生まれ、長じてチベットへ赴き、レボン寺のゴマン學院で修業し、一七四〇年歸國した。翌年、その手によってブリヤート最古と稱されるツォン・ゴル廟が建立された。この年には、後にハンボラマの常住所とされたグシー・エ湖廟も、ハタギン氏のジム・バ・アガルダ・エフ *Jimba Ayaldayin* によって建立されているが、これにもザ・ヤ・エフが關係を有している。ザ・ヤ・エフは一七六七年、エカテリーナ二世が召集した法典作成委員會に出席して、ディプタートル・ハンボ *Diputad mkhanpo* の稱號を授與され、後一七七七年入寂した。一方、ジム・バはイルクーツクの印務處からバンディダ號を授與されたが、ザ・ヤ・エフの死後、そのハンボ號を繼承して、バンデ・ヤ・ハンボと號するようになった。これがバンディダー・ハンボの成立であり、それは一七八〇年のことであつたとおもう。

モンゴル帝國の對外文書について

海老澤 哲雄

モンゴル帝國の對外文書に關しては、すでに E. Voegelin の研

究がある。それは、一二四〇年代から五〇年代にかけてブラノッカルビニなどの修道士が西歐にもたらしたモンゴル側の文書を考察したものである。その研究によると、モンゴル側の文書には、モンゴル帝國は、實際には未完成であるが、神の命により、地上を獨占的に支配する國家であり、地上の國は、すべてそれに服屬すべきであるという論理が見られるという。

本報告では、先ず、一二四〇年代以前の、部分的・間接的に傳へられているモンゴル帝國の對外文書について考察し、右の Voegelin の所説を補強したい。

次に、一二四八年、ルイ九世に届けられた文書を取り上げる。當時、王は十字軍遠征のためキプロスに滞在していた。そこへ、小アジアなどの統治を委任されていたモンゴル部將エルチギティの使節と稱する者が訪れ、その部將の書簡なるものを渡した。それは、懇懃を極めた、キリスト教色の濃い、友好的な内容の書簡である。モンゴル帝國がさきのような論理をふりかざした服屬要求の文書を諸國に送っていたとすると、このときに限り、友好的な内容のものが送られたのは、どう理解すべきであろうか。この點について、P. Pelliot や J. Richard の所説を検討しつつ考察したい。

ウシュル・ウシュール・アーシャー

嶋田 襄平

(一) 'ushr は「十分の一」を意味するアラビア語であるが、イスラム法の用語としては、ムスリムに課せられた救貧税のうち土地所有